



イラスト・すみのけいし

大阪弁のイメージの変遷

仲野 井上さんの『大阪的』を読んで、一応は京都人である井上さんから見た大阪のイメージをぜひお聞きしたいと思い、対談をお願いしました。よろしくお願ひします。本にも書いておられましたが、いまは京都のほうが大阪より断然イメージのいい街になってますけど、昔はそうでもなかったんですか？

井上 必ずしもそうではなかったと思います。最近、昭和十年ごろのある雑誌で、東京で暮らしておられる元タカラジエン又私たちの座談会を読んだんですが、みなさん大阪弁なんです。それを東京の雑誌記者は「日本語におけるフランス語ともいべき大阪弁で語り合っている。江戸っ子には理解しがたい、得も言われぬ味わいがある」と言っていて、これ、いまの東京ではありえない反応ですよ。

仲野 その座談会では、いまと同じような大阪弁で話してらるんですよね？

井上 記録を見る限り、いまよりも大阪訛りがきついように思います。

井上章一さんといえば、大ベストセラーになった『京都ざらい』が有名です。京都とはいえ、洛中ではなく嵯峨に生まれ育った井上さん。京都人であるにもかかわらず、洛中育ちの「真の京都人」からは京都の人とは見なされない。そんな屈折した感情をぶつけた『京都ざらい』、最高に面白い本でした。

その井上さん、「大阪的「おもしろいおぼはん」は、こうしてつくられた」という本も出しておられます。大阪という街のイメージは、昔からあったものでなく、比較的最近のものにすぎない、ということをいろいろな角度から検討した出色の一冊です。

『大阪的』を読ませてもらって、大阪をステレオタイプから解き放ちたい、と、十二回にわたって連載した『大阪しちーだいぼー』と同じ匂いを感じました。それから、井上さんは、ひよっとしたら京都よりも大阪を愛したはるんと違うやろうか。

と、考えたというのは表向き理由。大昔のご本『霊樞車の誕生』以来のファンなので、一度お目にかかってみたかったです。ということ、『大阪しちーだいぼー』の延長戦、あるいは総集編という感じで、井上さんとの対談です。どうぞ、お楽しみください。

仲野 それでも味わいのある、きれいな言葉という印象があったことですか。たしかに、いまではありえない感覚ですね。

井上 作家の田辺聖子さんは、小説を書き始めたころ、「大阪弁をひっさげて、私はヘランソワーズ・サガン〜しよう」と心に決めたといいますが、そう本気で思えた時代があったんだと思います。代々続く大阪商人の、あまり経営能力もなく、色恋沙汰にうつつを抜かすようなほんほんたちが繰り広げるギャラントリーの綾みたいなものを表現するには、大阪弁だと思いがあつたのではないのでしょうか。

仲野 なのに、大阪弁のイメージは、ここ百年くらいで変わってしまったと。全国的に大阪の言葉がガラが悪いと思われ出したのは、いつごろからだとお考えですか？

井上 言いにくいんですが、二十世紀はじめから、大阪が工業都市になっていく、その過程で言葉も変わっていったのだと思います。全国の、特に西日本や朝鮮半島の、跡継ぎにはなれなかった男子が、大阪の工場に集中したんですよ。まあ女子も含めてやけど。で、品のいい船場の人たちは六甲山へ逃げたし、どちらか

いのうえ・しょういち●1955年京都府生まれ。建築史家・民俗研究家。『大阪的「おもしろいおぼはん」は、こうしてつくられた』(幻冬舎新書)、『ミッションスクールになぜ美人が多いのか 日本女子とキリスト教』(共著・朝日新書)など著作多数。

なかの・とおる●1957年大阪府生まれ。専門は生命機能研究など。著書に『怖いもの知らずの病理学』(あまり)病気をしない暮らし』(晶文社)、監修した本に『遺伝子 親密なる人類史』(早川書房)がある。